

Title	膿胸遺殘死腔ノ治療方針ニ關スル木島學士ノ發表ニ就テ
Author(s)	鳥潟, 隆三
Citation	日本外科宝函 (1936), 13(2): 329-330
Issue Date	1936-03-20
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2433/205607">http://hdl.handle.net/2433/205607</a>
Right	
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	publisher

# 膿胸遺殘死腔ノ治療方針ニ關スル

## 木島學士ノ發表ニ就テ

京都帝國大學醫學部外科學教室

教 授 鳥 潟 隆 三

九大赤岩外科教室ノ木島學士ハ膿胸遺殘死腔ノ治療方針トシテ、大正13年最初ノ發表以來余ノ教室ニテ唱道シ居ル方針ヲ原則的ニ採用シ、3例ノ全治患者ヲ報告シタノハ非常ニ悅バシキコトデアル(東京醫事新誌、昭和11年1月18日發行、第37頁)。何トナレバ本邦ニテハ此ノ如キ治療方針ヲ採用シテノ治驗例ノ報告ハ從來單ニ余ノ教室員(伊藤肇、西尾重、廣瀬研之)或ハ間接ニ余ノ教室ト關係アル者(例ヘバ多米時彦)カラノミ發表サレテ居ルノミニテ、他方面カラハ毫モ發表サレテ居ナカツタカラデアル。自分ノ主張ガ師弟關係ノ無イ他方面カラ試ミラレタコトハ悅バシキコトデアル。

木島氏ノ發表ノ中ニハ次ノ如キ記載ガアル。“1920年 Moschcowitz ガデーキン氏液ノ如キ……中略……唱道セシ以來、我國ニ於テモ鳥潟・伊藤氏其他多數諸家ノ此ノ療法ニ關スル追試報告アリ、……下略”

此ノ記述ニヨルト、鳥潟・伊藤等ハ M ノ報告ヲ追試シタモノデ、木島氏モ亦タ M ノ說ヲ追試シタモノトイフコトニナル。コレハ少々事實相違デアルカラ、茲ニ學術的發表ノ神聖ト鳥潟ノ創意ノ保護トノ爲ニ訂正ヲスル必要ヲ認メルノデアル。

鳥潟ハ1920年正月ニ發表サレタ Moschcowitz ノ論文ナドハ全ク知ラナカツタモノデアル。今度(1936年2月4日)始メテ通讀シタ程ノモノデアル。鳥潟ハ1917年12月第1回ノ外遊カラ歸朝シ、「コクチゲン」ノ效果ヲ試ミル目的カラ、コレヲ膿胸遺殘死腔ノ治療ニモ使用シ、ソレデ腔内ヲ無菌のトナシ、陳舊性ノ膿胸ヲ治癒セシメタノデアル。即チ大正8年(1919年)夏頃カラ此ノ治療方針ヲ採用シ、死腔ヲ有スル儘ニテ陳舊性ノモノガ治癒シ得ルコトヲ經驗シ、次デ京大外科學教室ニ於テ此ノ方針ノ下ニ治療スル様ニ當時ノ助教授伊藤肇ヲ指導シ、治驗例ヲ第17回近畿外科集談會ニテ報告セシメ、大正13年(1924)3月始メテ東京醫事新誌ニ發表セシメ、更ニ其年ノ4月東京ニ於ケル日本外科學會ヘノ發表トナツタモノデアル。當時何人モコレガ Moschcowitz ノ追試デアルト言ツタ者ハ無カツタ。

大正14年(1925)福岡ニテ日本外科學會ノアリシ際、教室出身西尾重ガ死腔ヲ有スル儘ニテ陳舊性膿胸ガ治癒シ得ル1ツノ據リ所トシテ組織學上死腔内面被覆細胞ノ所見ヲ述ベタ。

此際從來ノ治療方針タル『死腔ノ存在ヲ許サズ之ヲ荒蕪セシメン』トスル種々ナル手術ニ對シテ京大外科ガ非難ヲ加ヘタル際ニ、當時岡山醫大教授ノ赤岩博士ガ起立シテ、死腔ヲ荒蕪スル

目的デハナクシテ肺臓ヲ膨脹セシメ以テ死腔ヲ消失セシメル目的デアルト述ベテ陳舊性膿胸ニ對スル手術的療法ヲ支持シテ毫モ譲ラズ、前年ノ發表ニテ提唱サレタル鳥潟ノ陳舊膿胸治療方針ナドハ毫モ採用スル氣色ダニ見エナカツタモノデアル。其後ト雖、ヨシソノ様ナ方針デ治ツタトシテモ、ソレハ假面的ノ治癒デアツテ、早晚再發ガ起ルデアラウトノ心配ガ往來シテ居ツタカノ如クニ鳥潟ハ感ジテ居ツタ。

上述ノ様ナ次第デアルカラ鳥潟ノ行ツタノハ全ク Moschcowitz ノ追試ニ過ギナイモノデアルナドハ誰モ言ハナカツタモノデアル。マタ事實鳥潟ハ M 等トハ全ク無關係ニ此ノ治療方針ヲ創立シタモノデアル。M 等ハデーキン氏液ヲ得テ、M ニ及ンデ(1920年)始メテ、無菌の遺殘死腔治癒ノ經驗ヲ得、鳥潟ハ「コクチゲン」ノ利用ニヨリテ大正8年(1919年)夏ヨリ始メテ同様ノ事實ヲ認メタモノデ、決シテ M ノ追試シタモノデハナイ。單ニ無造作ニ鳥潟・伊藤其他ハ相率キテ Moschcowitz ノ追試シタト述ベタ木島氏ノ記述ハ訂正サレネバナラス。併シ1920年ニ現ハレタル M ノ發表ヲ1936年木島氏ガ追試發表シ其ノ效果のナルコトヲ認メタトノコトニ對シテハ鳥潟ハ敢テ異議ヲ挿ムモノデハナイ。ソレハドウデモヨイ。

ケレドモ、此ノ新治療方針ニ關シ鳥潟ノ教室カラ昭和4年(1929年)3月廣瀨研之ガ再ビ詳細ナル其後ノ報告ヲ發表シテ居ルコトヲ不問ニシテハナラス。ツマリ木島學士ハ Moschcowitz ノ治療方針ヲ追試シタト聲明スルヨリカモ、鳥潟ガ1918年以來引續キ行ツテキル方針ヲ追試シタト述ベル方ガ縁ガ近イシ、血モ濃イカノ感ガスル(尤モ此ノ感ヲ共ニセヌ人ニハソレヲ強イルツモリデハナイ)。

追記。多クノ例症中ニハ前述ノ如キ方針デ治癒セヌ(治癒シ難イ)モノモ多々アル。デーキン液ニ限ラズ、殺菌劑ノミデ遺殘死腔ヲ無菌ニスルコトハ六ツカシイ。免疫的處理ノ方ヲ自分ハ殺菌劑ヨリモ良好ト考ヘル。併シ凡テノ陳舊膿胸ハ免疫的處理ノミデ全治スルトハ決シテ主張シナイ。排液管ヲ拔去スル時期ヤ其他各般ノ注意ガ必要デアル。樹枝様ニ Sinus ヲ有スル膿胸ヤ氣管支瘻ノアルモノナドハ全然問題外デアル。

教室ノ主宰者ト、其ノ主宰者ノ指導誘掖ニヨリテ行ハレタル研究ノ發表者トヲ同列ニ並ベテ『鳥潟・伊藤・其他諸家ガ此ノ療法ヲ追試シタ』ナドト記載スルコトハ教室(Schola)ノ主宰者ニ對スル1ツノ侮辱デアルコトハ言フ迄モナイコトデアル。

學者ノ生命ハ其ノ肉躰ノ中ニ宿ツテハ居ラズシテ、學術的發表ノ中ニ存在シテ居ルノデアルカラ、肉躰ニ對スル毀傷以上ニ學術的發表ノ毀傷ヲ念トスルモノデアル。學者デアレバアル程此ノ念慮ガ強イモノデアル。百年ノ後ニ果シテ何人ガ鳥潟ノ生命ヲ保護スルデアラウカ。ソレハ唯ダ眞實ノ學者ニ期待セネバナラス。吊詞ナドデ學者ヲ瞑目サセ様トスルノハ無論間違ヒデアル。